

# 二十世紀初頭の中国東北地区における文学状況について

## ——『盛京時報』を中心に——

平石淑子

### 一、はじめに

近年中国東北地域、いわゆる「満洲」に関する研究が盛んになってきたが、人々の関心はほとんど「満洲国」時代に集中しているといつてよい。「満洲国」に関する史実の解明が、特にその建設に深く関わった国の国民にとって重大な責務であることはいうまでもない。だが「満洲国」時代が、東北地域の従来の歴史や文化の営みから完全に切り取られているはずはない。

「満洲国」建設以前の東北地域研究の遅れには、東北地域の特殊性が関係している。小峰和夫は、東北地域は従来ツングース系の狩猟民族が土着し、「伝統的な満洲の社会や風土を形成していたのは、農耕民族や農業ではなかった」といい、従来の研究がそのことに十分留意してこなかったことを指摘している<sup>①</sup>。そのような土地に生まれた文学についてもこれまで人々の関心は薄く、今世紀に入つて漸く『黒龍江文学通史』（以後『通史』<sup>②</sup>）がそれに触れている。『通史』によれば、当該地域にはもともと各民族固有の伝承文学があつたが、特に明代以降は主として「閩内」から当地

に流入してきた漢族を中心とする「移民」による文学活動が見られるとする。しかし満洲族が「関内」に進出して清を建てて以降、清は多くの漢族が流入して父祖の地を荒らすこと、また満洲族が漢族に同化していくことを恐れ、封禁政策を採る。小峰は封禁政策が施行されるまでの東北の移民を、(一)直隸省及び山東省出身者を中心とする農業移民、(二)直隸省や山西省出身者を中心とする商人、(三)野生人參や砂金を狙って流れ込む無法者に分けているが、これ以外の流入者として流刑者がいた。『通史』は、これらの流刑者のうち多くはいわれのない罪に問われた文人や官吏で、彼らは自身の悲憤慷慨を詩文に託したという。小峰は、「移住者」によって「満洲」と「中華」の境は不明瞭になり、「満洲は中華にたいして『前期的植民地』と呼ばれるような地位」に立った<sup>3</sup>、といっているが、それらの「移住者」の中には当然流罪に遭った文人及び官吏も含まれるべきであり、むしろ彼らが近世における東北地域の文学活動の中核を担っていたと考えられる。東北が「前期的植民地」となったその頃、更に北からはロシア人が、南からは日本人が流入してきた。彼らもまた自身の歴史を背負い、自身の文化、文学を持ち込んだ。即ち中国東北地方は近世以降、長い時間をかけて多種多様な文化の混在、融合、また敵対を内在させ、二十世紀を迎えようとする頃、歴史上に姿を現し、人々の注目を集めるところとなったのである。

既に述べたように、中国東北地域の近現代を考える時、特に「満洲国」の建国に関わった人々の末裔としての我々はそれを避けて通ることはできない。「満洲国」は当該地域に暮らす人々から、文化、文学の面において何を奪ったのか、何を奪え、また何を奪えなかったのか、あるいは変えられなかったのか。本稿はそれを知る手がかりを得ようとするものである。その一步として、本稿は二十世紀初期に東北地域で発行された中国語新聞を取り上げる。新聞を取り上げる根拠は、『通史』が二十世紀の東北文学の牽引者は新聞文学であるとしていることに基<sup>4</sup>づいており、またそれ以外の資料の入手が困難であることにもよる。

東北地域最初の中国語新聞は、一九〇六年三月に哈爾濱でロシア人により発行された『遠東報』である<sup>5</sup>。しかし残念ながら『遠東報』は創刊号からおよそ四年半近くが欠号となっており、その当初の姿を知ることができない。本稿

が『盛京時報』を取り上げる理由としては、第一に、『盛京時報』は『遠東報』に半年遅れて発行されているが、現存する新聞資料の中で最も古い号を残し、しかも最も欠号が少ないことが挙げられる。加えて『通史』が、一九一八年に東北最初の文芸副刊「神皋雜俎」を発行した『盛京時報』の功績を高く評価していることも理由の一つである。『通史』は、創刊者の中島真雄を「古くからの文化特務」としながらも、創刊当初から社説により「政治維新と白話新聞の創刊を叫」び、「白話新聞によつて啓蒙を行い、民智を開くこと、梁啓超の『小説界革命』の理論により、淫らな演劇や旧小説を改良し、小説の社会的作用と社会的地位を主張した」とする。筆者は『盛京時報』紙面上で前掲の『通史』の評価を追いながら、それが東北の近代小説、また東北の文学にどのような影響を与えたのかを考察しようとしているが、資料が膨大であることと紙幅に限りがあるため、本稿では『通史』が『盛京時報』の東北近代文学における大きな功績の一つとしている「小説」欄の誕生に焦点を絞ることとする。

## 二、『盛京時報』の発行

『遠東報』がロシア人によつて発行されたことは既に述べた。『盛京時報』も既に述べたように、日本人によつて発行されている。即ち二十世紀初頭に新聞文学を東北に持ち込んだのもまた、「移民」であつたことになる。

実は『遠東報』以前、「北滿」では既にいくつかの外国語新聞が発行されていた。例えば一九〇一年八月十四日、哈爾濱で最初のロシア語の新聞『Харбинский листок ежедневных телеграмм и объявлений（哈爾濱每日電訊廣告報）』<sup>7</sup>が、一九〇三年には同じく哈爾濱で中東鐵路商務所により『Харбинский вестник（哈爾濱公報）』が発行されている。<sup>8</sup>この『哈爾濱公報』がその後中東鐵路の機関報となり、『哈爾濱新報』、更に『哈爾濱日報』と改名し、一九〇六年三月十四日より中国人読者に向けた中国語新聞『遠東報』として新たに発行されたのである。『俄僑與黑龍江文化』は、一九〇一年から二六年にかけて哈爾濱では全部で百四十一種のロシア語の雑誌が発行されており、うち文学芸術と関係のあるものは三十四種見られるが、それらはすべて一九二〇年以降のことであつたとする。<sup>9</sup>

これに対し「南滿」では日本語の新聞が発行されている。東北地区で発刊された日本人経営の新聞に關しては李相哲『滿洲における日本人経営新聞の歴史』<sup>10)</sup>が詳しい。李によれば、東北地区で最も早く発行された日本語新聞は『滿洲日報』で、後に『盛京時報』を発行する中島真雄により一九〇五年七月二十六日から二年余、營口で発行されている。中島については李相哲の前掲書も詳しく触れているが、李の関心はあくまでも日本語新聞にあり、中島が營口『滿洲日報』の経営から手を引いた(一九〇七年十月)後、奉天で中国語新聞『盛京時報』を創刊したことには触れていない。中島はなぜ東北で中国語新聞を発行しようと考えたのか。『盛京時報』に先立ち、彼は福州で台湾總督府の資金を得、<sup>11)</sup>「一八九二年十二月、中国語の雑誌『福報』(一八八七年創刊)を買収し、題名を『閩報』と改めて発行」、更に北京に行き、当地に新聞らしい新聞がないことから、借金をして一九〇一年、やはり中国語の日刊紙『順天時報』を発行しているが、後に述べるように、彼の新聞事業は東亞同文会及び当時の外務省と深い関わりがあった。中島は自伝『不<sup>12)</sup>退庵の一生』に次のように述べている。

当時北京には外国の新聞は勿論支那人の新聞すらなく、名は忘れたが或る日本の浪人が一度其発刊を企てたが直ぐ潰れたと云ふ事であった。私は此際どうしても北京に新聞がなくてはならぬと信じ曾ての福州に於ける閩報の経験を基礎として、此處に新聞を創刊する事に決意し、之を小村(寿太郎)公使に相談した處、公使は全く不同意で「やるのなら天津でやり給へ」と云ふのであつた。蓋し之迄北京に新聞が無かつたのは、余りお膝元過ぎて、色々な面倒が起り易く、其都度公使館が困るだらうと云ふ心配らしかつた。併し私は新聞を北京に置いてこそ顕著なる効果がある。天津には既に咸報と云ふのがあつて、拳匪の乱に壞はされてからは、天津日々新聞と改題して現に発刊して居る際であるから、尚ほそれ以上に新聞の必要はあるまいから、是非北京でやりたいと懇請した處、公使は「やるなら勝手にやり給へだが、其代り外務省は援助しないから」との事であつた。そこで私は「それでは私が自由にやるが、差支ないか」と聞くと、「差支なし」との返事を得たので、愈々新聞発行の決意をした。<sup>13)</sup>その後日露關係が緊張するに伴い、公使館からの要請を得て陸軍省や外務省の情報を新聞電報として『順天時報』に

掲載し、これが日露戦争に際して非常に役だったということ、『順天時報』は外務省に売却され（一九〇五年）、中島はその資金を元手に『満洲日報』を創刊している。<sup>11)</sup>

嘗口『満洲日報』は「日本文、漢文、英文の三種の記事を掲ぐる」ものであった。<sup>12)</sup> 該報は一九〇八年、「窪田文三君が嘗口領事時代に至つて、主筆稲垣（伸太郎）君と窪田君との間に大衝突を起こしたので、私は満洲日報を奉天に移し、盛京時報社に合併したが、両者異なりたる建前にある新聞を一家に存置しては、第一日支職工の風紀統制上の困難なると会計上折角伸びんとする盛京時報を圧迫する情勢あるに鑑み、竟に意を決して満洲日報を任意廃刊し、其記者はそれぞれ他に転職せしめ、主筆稲垣君のみ盛京時報に留任せしめ、特に日本職工は当時満洲日々新聞が創立の際であつたので、原口聞一君を介して無条件で同社に収容せしめた」<sup>13)</sup>。しかし実際に中島が嘗口『満洲日報』から手を引いたのは一九〇七年十月のことで、『満洲日報』の刊行中、既に彼の頭の中には『盛京時報』発刊のもくろみがあったようである。<sup>14)</sup> 『不退庵の一生』によれば、中島は一九〇五年九月、奉天に児玉（源太郎）総参謀長を訪ね、当地に漢字新聞、即ち中国語新聞を発刊することを提案し、「頑強にも新聞報国を主張」したが、児玉はもともと新聞事業には消極的であつたため、この時は計画は頓挫した。

さて、中島は東亜同文会と深いつながりを持つていた。東亜同文会成立（一八九八年）後、中島は幹事となり、北京など中国の主要五力所に置かれた支部のうち福州を任されている。<sup>15)</sup> 翟新『東亜同文会と中国』<sup>16)</sup>は、東亜同文会が国家機関と関わりの深い団体で、「国内及び国際政治へ直接に影響を与える行動団体であり、政策助言、世論形成、情報収集及び提供という役割をも果たしていた」ことを指摘している。<sup>17)</sup> なお『盛京時報』という名称は、「曾て露国が奉天占領中、盛京報と云ふ露字新聞を発行して居た故其名を襲ふて命題したもの」<sup>18)</sup>であつた。

### 三、「白話」から「小説」へ

『不退庵の一生』には、「創刊当時の幹部は一宮房次郎、<sup>19)</sup> 稲垣伸太郎、辻岡三郎氏等で、営業部を担当したのは現社

長の染谷保蔵氏であつた。尚ほ今の奉天新聞社長の佐藤善雄氏は創業後入社したと記憶する」とあるが、奉天総領事館の「新聞紙二関スル調査報告」（明治四十一年（一九〇八）六月二十四日）では発行人、編集人、社長、主筆、何れも一宮房次郎となつており、「裏面ノ操縦者」及び「重ナル出資者」が中島、「裏面ノ操縦者」には「実質上ノ社長ニシテ表面其名ヲ出サザルモノ中島真雄 外務省ヨリ一ヶ年六千円ヲ補助ス」と記されている。また「記者」の欄には日本人として一宮、辻岡、中島に加え佐藤善雄の名があり、稲垣の名はない。また中国人記者として浙江出身の陶植齋、俞継薈の名前がある。一方『通史』は次のように記述する。

彼（中島）は中国資産階級の革命運動を支持していたので、資産階級革命党の徐鏡心を主編に招き、その他の資産階級革命党の人々を編集に当てた。創刊の当初から連続して「社説」を発表し、政治維新と白話新聞の創刊を叫んだ。白話新聞によつて啓蒙を行い、民智を開くこと、梁啓超の「小説界革命」の理論を用いて、淫らな演劇や旧小説を改良し、小説の社会的作用と社会的地位を主張した。そして「文苑」、「白話」という二つの文学欄を設け、前者には格律詩詞を、後者には白話の寓言や故事を載せた。翌年（一九〇七年）初め、「白話」を「小説」に改め、白話文言小説、寓言、古今中外の歴史人物故事、政治散文などを掲載し、政治改革、変法維新を宣伝し、読者に歓迎された。

「白話」欄を「小説」欄に改めた趣旨として『通史』は、「古今の英雄豪傑、孝子忠臣、また東西の学問理論、さまざまな書物、およそ人の心や世の道理に関するものを選び、保守的気風を取り払い、社会に貢献するものを選んだ」としているが、これは一九〇七年五月十五日『盛京時報』掲載の論説「論小説急宜改良及其改良之辦法」（後「改良之辦法」）に見えることである。五月四日の同紙論説「論演劇急宜改良」にイギリス人の「小説は国民の魂である」という言葉を引用したことにつき、小説はそもそも逸文や記事であるのになぜそのように重んじられるのか、という読者の質問に答え、著者は、中国の従来⑤の小説、例えば「紅樓夢」、「彭公案」、「三俠五義」などは男女の情愛とか盗賊の武勇を称えるようなものであつたが、読者が内容に影響を受けた結果、全国にそうした気風が蔓延してしま

う。一体に中国語の文法は難しく、経書の類は理解するのが難しい。これに対して小説の類はわかりやすいから、教養のない者でも読めてしまい、それを真実だと思ってしまう。更にそれを記憶し、一人が話せば、それを無責任に聞く者は百人になり、その百人がまたこれを話せばそれを無責任に聞く者は千人になるだろう。女子どもにまで行き渡れば、それこそ真実であると信じ込むに違いない。イギリス人が小説は国民の魂であるといつたのは、まさにこのことである、と説明する。だがこれは結局梁啓超「小説界革命」の受け売りで、イギリス人を引き合いに出すところは梁啓超「訳印政治小説序」そのままという<sup>96</sup>。しかし、小説改良のためには先ず旧小説を排除すべきだ、との主張に続き、奉天に「白話報館」を設立し、その中に小説編集の一部門を設けるべきである、と主張していることは、後の「神皋雜俎」への道筋を示しているように見える。だがこの論説が「神皋雜俎」の最初の構想を示すものであるなら、発案から実現まで実に十一年を要したことになる。

『通史』は一九〇七年の初めに「白話」欄を「小説」欄に改めたといっているが、実際はそう簡単ではなく、それによって新小説が生まれたわけでもない。創刊以来一九〇八年末までの「白話」あるいは「小説」欄に掲載された文章は次の通りである<sup>97</sup>。なお、アラビア数字は叙述の便のため便宜的に筆者が付したものの、「？」は欠号があるため確認が不可能であることを示す。

- ① 【白話】 大隈伯爵演説中国創憲政論（〇六・一〇・二三〜三〇、全六回）
- 2 【白話】 李靴子（一〇・三二〜一一・二、全三回）
- ③ 【白話】 演説俄国圧制家之結果並歴史（一一・三〜六、全二回）
- 4 【白話】 張超（一一・二一〜二五、全九回）
- 5 【白話】 外交実話 英法条約與坤角（一一・二八〜一二・二二、全十二回）
- ⑥ 【白話】 直隸農務總會演説（一二・一一）
- ⑦ 【白話】 署大名鎮言觀察源勲論統備兵白話（一二・一五）

- ⑧【白話】論報館與國民之關係（二・二一九）<sup>28</sup>
- 9【白話】郎得（二・二三〇、二五、全二回）
- 10【白話】丐者（〇七・一・五）
- ⑪【白話】物理動靜淺說（二・六〇八、全二回）
- 12【白話】神游（一・三〇一、全二回）
- ⑬【白話】熊岳宣講所頒發勸學說（二・二四）
- ⑭【白話】地方自治之利益（二・二〇三、全二回、「節録王叔口演稿」）
- ⑮【白話】奉天巡警總局戒烟白話告示（二・七〇八、全二回）
- ⑯【白話】參觀学界觀摩會記略（二・九、「順天時報白話記者稿」）
- 17【小説】偵探奇譚（四・？〜二六、全十二回？）<sup>30</sup>
- 18【小説】探險英雄伝（四・二七〜五・九、全九回）
- ※「論演劇急宜改良」（五・四）
- 19【小説】哥兒達（五・一〇）
- 20【小説】德皇赴被執下獄（五・一一〜？、全八回？）
- ※「論小説急宜改良及其改良之辦法」（五・二五）
- 21【小説】不倒翁（五・二二）
- 22【小説】俄滅波蘭記（五・二六〜六・二、全七回）
- 23【小説】法国盛衰記（六・？〜八・二五、全五十六回）
- ⑲【白話】說衛生（九・五）
- ⑳【白話演說】論中国的自由（九・二二）



②6 【白話】 当軍人的不応分賭要（九・二四、「徐立三稿」と署名がある）

27 【白話】 冒險奇談（二〇・五）<sup>①</sup>）

28 《小説》 砒霜計（一〇・一五〜一九？、全三回？）

29 《小説》 四書新演義・訳稿・最近西洋戒譚（〇八・二・九）（新年特別号のため、体裁が通常とは異なる）

30 《小説》 愛子之医（二・一八）

③1 【白話】 奉天全省僧立教育会代表僧覺先第四次研究会白話浅説（五・二七）

32 《小説》 夢開国会（七・二三、「岡」の署名がある）（「皇上萬壽聖節」のための特別号）

33 《小説》 毒洲探險記（二一・六〜？、全？回）

34 《小説》 撰政記（一一・二六〜二七、全二回）

確かに一九〇七年四月以降「小説」欄が登場してはいるが、だからといって「白話」欄が消えたわけではない。内容について見ると、囲み数字のものは題名と内容に大きな乖離はなく、どちらかという論説に近いものである。ただ紙面を分けて「論説」あるいは「論叢」欄もあり、確かに「白話」欄は白話で書かれているという特徴を持つが、それ以外内容的にどのような差異があるのかは明確ではない。とりあえずここでは「小説」と分けられた「白話」欄について、白話で書かれた議論、論説、または演説を収録したものと定義しておく。

さて、「小説」欄が登場するまでに「白話」欄の中に右記の定義から外れるものがいくつもある。5は英仏の外交的取引を物語仕立てにしたもの、物乞いがどれほど気楽で割がいいかを述べる10と催眠術について述べる12はエッセイである。残る2、4、9が何れもフィクションと見られ、後の小説につながるものとして注目される。

2「李靴子」は次のような話である。ある夜、寶という宰相の家に靴子李と呼ばれる怪盗が忍び込む。李は以前宰相の妻のかんざしを枕元から密かに奪っていた。それを知って驚く宰相に李は金を要求する。三日後に再び現れると予告した李の先回りをし、宰相は李を捉えるが、李は、奪った金は貧しい者に分け与えてやるのだとそぶき、縄を

抜けて姿を消す、鼠小僧のような話である。4「張超」は、溺愛されて育った金持の一人息子が靴下屋の女性に一目惚れをし、それを知った母親が観音様のお告げと偽って縁結びをしようとする。実はその女性には結婚歴があり、再婚は厭だというのが強引に押し切られ、結局興入れをすることになる。だが結婚してみると彼女はなかなか気に気丈で、張はいささか嫌気がさし、結局女性を殴って死なせ死体を城外に遺棄するが、その後死んだはずの女性が張の前に姿を現し、張は狂人となるという話である。言葉こそ白話であるが、内容的には旧小説と何ら変わりはない。中で異色の作品が9「郎得」である。舞台はイギリスとニューヨーク、登場人物はすべて外国人である。英国の若い伯爵が旅行先のニューヨークで出逢った女優と身分違いの恋愛に陥る。女優と結婚の約束をするものの、それによって財産を失いそうになった彼は一計を案じ、同行させていた美しい下僕に財産の一部を譲渡することを条件とし、彼を身代わりとして女優と結婚させる、という話である。作者などの情報は一切ない。「郎得」、「美無士」、「美決児」という登場人物の名前設定には不自然さも残るが、あるいは早期の翻訳小説であることも疑われる。しかしいずれにしても「白話」欄に掲載された文章には「白話」という共通点はあるものの、『盛京時報』が目指した新小説に当たるものも見当たらない。

さて「小説」欄を設けた17以降を見ると、確かに「小説」に収められているものは前述の「白話」の定義（白話で書かれた議論、論説、演説）から外れるといつてはばまちがいはない。しかしなお「白話」と「小説」の境界には不明確なところがある。例えば「白話」欄に収録された「海に臨むユートピア」を舞台とする27。このユートピアには国王の避暑のために作られた「鎮海亭」と称する美しい建物がある。この建物の下は海で、渦を巻いており、この危険な渦に近づく者はなかった。ある時国王が渦の下の世界を知りたいと思い、身につけていたダイヤを投げ入れ、拾って帰った者にはそれをやるという。皆が尻込みする中で一人の若者が進み出、渦に飛び込み、みごとダイヤを拾って生還する。国王は喜び、もう一度潜って戻ったら王女を妻にやるという。若者は躊躇したが天女のように美しい王女を見て、再び渦に飛び込み、再び浮かび上がることはなかった、という話である。明らかにフィクションで

あり、「小説」欄に収録すべきものである。

「論演劇急宜改良」及び「改良之辦法」は「小説」欄が設けられた後に掲載され、小説に対する態度を明らかにしているのだが、それにしても掲載された作品に、内容が刷新されたという印象がない。張騫の西征を題材とした18や王莽の生涯を紹介する34、外国の歴史を紹介する22、23などは確かに「改良之辦法」がいうように、「古今の英雄豪傑、孝子忠臣、また東西の学問理論、さまざまな書物、およそ人の心や世の道理に関するもの」を選んだといえよう。しかし21「不倒翁」はどうか。玩具の不倒翁に血を付けたことで、不倒翁が本人の身代わりとなり生気を吸い取っていく、それに気づいて不倒翁を焼き、ようやく健康を回復したという話で、「改良之辦法」が批判する旧小説の類と全く変わらず、しかもこの「小説」が「改良之辦法」の直後に掲載されたことはむしろ皮肉ですらある。即ち、「白話」と「小説」を分け、「小説」のあるべき姿を謳っては見たものの、実際の具体的な形として示すことが、この時点ではまだできていないということがわかる。

さて、これらの「白話」及び「小説」の中には既に述べたように外国を舞台とするものがいくつもあるが、既に述べたように、中には翻訳ではないかと思われるものがある。例えば5「英法条約與坤角」の舞台はドイツ、「郎得」はイギリス及びニューヨーク、17「偵探奇談」はモスクワ、19「哥兒達」もロシアを舞台とし、登場人物もすべて外国人である。当時中国人、もしくは日本人の作者が外国を舞台とし、全登場人物を外国人に設定することが可能であったとは思えない。もちろん各作品に作者の名も、翻訳者の名も記されていないため、断定はできない。しかし『通史』が東北で最初に発表された翻訳小説を19「哥兒達」であるとしていることに対し、それより以前に遡る可能性もあるのではないか。

#### 四、おわりに

「小説」への道は平坦ではなかったようだ。それは「白話」「小説」を問わず、それぞれの掲載の間隔からも想像に

難くない。例えば前掲の16から17まで、少なくとも三十九号分（およそ一ヶ月半）の間隔がある<sup>②</sup>。また23と24の間はおよそ半月、「小説」間で見れば23と28の間は二ヶ月である。更に28と29の間もおよそ三ヶ月半、30、31の間が三ヶ月余、30と32で見れば五ヶ月余、32から33までも三ヶ月余の間隔がある。しかも「小説」欄の設置から二年近い年月を経て、「改良之辦法」の主張を体现した作品は現れていない。「小説」によつて「国民の魂」を導こうという意気込みを打ち出したものの、「小説」を産み出すことに対し、実際にはさまざまな模索や逡巡があつたことを、この掲載間隔は示している。

またこの時期に掲載された「白話」、「小説」に共通してほとんど作者の署名がない。これは旧詩を掲載した「文苑」欄に作者の名前が明記されていることと極めて対照的である。このことは、小説が「国民の魂」であるとされながら、そこに記名をするほどの価値が置かれていない、即ち未だ正当な文学と意識されていないことを意味するのである。理想を高く掲げ、「小説」欄設置という画期的な試みを行ったものの、結局は文学において、依然旧い思考のままであつたといえよう。十九世紀、ロシアにおいては既にトルストイらが現れ、また日本においては坪内逍遙の「小説神髓」が生まれ（一八八五年）、尾崎紅葉らが活躍していた。しかしながらロシアや日本からの「移民」が支えた文学活動は、この時点ではまだ問題提起に留まつている。即ち外国からの「移民」は当該地域に新たに新聞文学を持ち込み、新小説という新しい概念を持ち込みはしたが、その実践はなお旧文学の圏いの中から抜け出せずいた中国人作家たちにゆだねられていたことだろう。

本稿では「白話」から「小説」への転換期という、極めて短い時期しか扱えなかつた。今後更に時代を下つての考察が必要である。また一九一〇年以降は『遠東報』もかなり残されており、更に二十年代に入ると中国人経営の新聞も発行されるようになる。今後それらと比較、考察することも重要な課題であると同時に、中国の他の地域における動向との関係にも目配りが求められる。そして『盛京時報』の成立に関しては、既に述べたように東亜同文会との関係が無視できない。この問題に関しても今後関心を持つて調査を続けていきたい。

- (1) 『満洲—マンチュリアの起源・植民・覇権』二〇一一年、講談社学術文庫。
- (2) 彭放主編、二〇〇二年、北方文艺出版社。黒龍江省社会科学院の研究員を中心に、渤海国時代から文革後までの黒龍江省における文学活動を総括する。全四冊。
- (3) 『満洲—マンチュリアの起源・植民・覇権』一二二頁。「前期的植民地」という用語は畑中幸子「中国東北部における民族誌的複合」(畑中幸子他『東北アジアの歴史と社会』一九九一年、名古屋大学出版会)よりの引用。
- (4) 『東北文学史』(馬清福、一九九二年五月、春風文艺出版社)は清代の流刑者について、次のように記述する。「彼らの中には平民もいたし、清朝の官吏文人もいた。確かに罪を犯した者もいたが、ほとんどは不当な罪によつて罰せられた被害者であった。東北流浪者の詩歌は、主に無実の罪で罰せられた官吏文人の作である。これらの無実の罪を着せられた官僚文人は、ほとんどが順治、康熙、雍正三代の時代の人で、流された原因は非常に複雑であった。『罪』を背負つて東北という辺疆に追いやられ、冤罪で放逐された恨み、故郷を思う苦悩、失意の経歴、不幸な巡り合わせなどが混ざり合い、感ずるところがあればそれを詩歌に発散させた。また一部の人々は東北に来て、東北の地方官僚や人々に篤く迎えられる、時間が経つうちに東北を自身の第二の故郷と考えるようになったため、東北の風景を描写し、東北の人々を歌う詩を書いた」。そして具体的な創作者として、政治的罪により瀋陽に流された李呈祥(二六一七〜八八、山東沾化の人)、陳之遴(一六〇五〜六六、浙江寧海の人)、戴梓(一六四八〜一七二五、出身地不明)らの名前を挙げている。
- (5) 東清鉄道哈爾濱管理局の名義で創刊された。「創始者史弼臣と二人の助手多布羅洛夫斯基、韋廖夫金(原文不明)」は何れもウラジオストク東洋学院(現在のロシア極東連邦総合大学)の卒業生で、主編、編集、記者には中国人を招いたという(『通史』)。
- (6) 『神皋雜俎』は一九一八年四月二日(第三四一八号)から見る事ができるが、前年の十二月三十日(第三三四九号)以降四月二日までは欠号であるため、正確な開始時期は不明である。なお『神皋雜俎』の発行人は中国人穆儒丐である

とされる。

『中国倫陷区文学研究』（二〇〇七年、黒龍江人民出版社）は、穆儒丐（？～一九四六）は北京出身で、『盛京時報』に関わるようになったのは一九一九年であるとする。

(7) 李述笑『哈爾濱歴史編年』（二〇一三年、黒龍江人民出版社）による。李は主編及び出版人は後に哈爾濱における社会革命党の指導者の一人となった羅文斯基（原文不明）であるという。なお華京領の調査によれば一九一九年八月、ロシア占領軍によりロシア語の新聞『新辺疆報』が創刊されたとある（満洲における日本人経営漢字新聞に対する日本の外務省の関与について―『盛京時報』と外務省との関係を中心に〕：二〇一二年十月、日本マス・コミュニケーション学会発表レジюме）。しかし『哈爾濱歴史編年』にこの記述はない。

(8) 『俄僑與黒龍江文化』（榮潔、二〇一一年、黒龍江大学出版社）による。主編は中東鉄路局商務所所長К. Даварев（拉扎列夫：K. ラザレフ）であった。

(9) 『俄僑與黒龍江文化』によれば、哈爾濱で創刊された最初のロシア語の文芸雑誌は『Путь（遠方）』半月刊（一九二〇年）で、創刊したのはА.Тарановская-Орз（達拉諾夫斯卡婭・奧萊：А. タラノフスカヤ・オレ）筆名、Анна Дальняя（安娜・達麗尼亞：アンナ・ダーリニャヤ）である。なお、『哈爾濱歴史編年』の一九二〇年の記述の中にこの雑誌は見当たらない。

(10) 二〇〇〇年、凱風社。

(11) 『満洲における日本人経営新聞の歴史』。

(12) 一九四四年、恐らく私費出版である。緒方竹虎の序文によれば、「本小伝は（中島）翁が生前閑に乘じ加藤進君に口授筆記せしめたもの」である。国立国会図書館蔵。

(13) 『東亜同文書院大学史』（一九八二年、滬友会）は清朝末期の中国における日本人の言論活動について次のようにいう。「宗方小太郎が明治二十九年（一八九六）漢口で『漢報』を発行したのが、最初の日本人経営の漢字新聞である。宗方の

進言により、明治三十年には福州で『閩報』が発行され同三十一年には上海で白岩龍平らの発起で月刊雑誌『亜東時報』が発刊されたが、これは三十三年同文会が『同文滬報』を発行するに至って、併合されている。

- (14) 『東亜同文書院大学史』によれば、当時中国人経営の新聞が袁世凱のもくろむ帝制一色に塗りつぶされたのに対し、『順天時報』だけが帝政反対の記事を載せて中国人読者から歓迎され、発行部数が急増したという。しかし実際には経営は苦しかったようで、『不退庵の一生』によれば、外務省には一万円で売却したが、うち二、三千円を『順天時報』の赤字補填に当てたという。

(15) 『不退庵の一生』。

(16) 『不退庵の一生』。

- (17) 「盛京時報の発刊に就いては宮口に在りて満洲日報を経営しつつ待機中、準備を怠ら無かつたのである」(『不退庵の一生』)。

(18) 『東亜同文書院大学史』による。東亜同文会は一八九八年十一月、『日本新聞』社長陸羯南、『日本人』(後『日本及日本人』)を創刊した三宅雪嶺等明治初期のジャーナリストを擁した東亜会(一八九七年春成立)と、近衛篤磨を中心とし、『東京日々新聞』を創刊しその主筆であった岸田吟香をメンバーとする同文会(一八九八年六月成立)が合併したもので、その綱領には「支那を保全す、支那及び朝鮮の改善を助成す、支那及び朝鮮の時事を討究し実行を期す、国論を喚起す」とある。

(19) 二〇〇一年、慶応大学出版会。

(20) 翟新は、東亜同文会の世論形成活動に関して、中国では『漢報』、『同文滬報』などの中国語新聞を通じてそれを行っていたと指摘し、東亜同文会の発行したものは「義和団事件前後の時点で日本人が中国で発行していた新聞雑誌の半分以上を占める」という。そして東亜同文会の経営する東亜同文書院の第一期から第三三期(一九〇四〜三七年)の卒業生二千六百八十四名のうち、八百八十四名が満洲に職を得、うち二十四名が「新聞及び通信」の職に就いたとしている。

しかし東北地区における東亜同文会の活動には触れておらず、『盛京時報』に関しても言及していない。

- (21) 『不退庵の一生』による。なお東亜同文書院五回生で、「傲霜庵」の筆名で『盛京時報』の主筆を務めた菊池貞二は次のようにいう。「奉天大会戦で、一敗地に塗みれた露軍が潰え去った後、わが軍が奉天の露軍倉庫を点検したところ、そこから一枚の金看板が出て来た。それには『盛京報館』の四大字が刻まれてあった。按ずるに、露国が団匪事變のどさくさに乗じて、全満洲を侵略、英米其他の抗議を完全に無視して、不当占領を継続しながら、着々経営の歩武を進めていた。無論言論機関なども重視して、旅順には已に露文『遠東報』を発行し、次いで奉天に『盛京報』を、哈爾濱に漢字紙『遠東報』発行の予定だったらしい。中島翁が奉天小西関に、わが『盛京時報』を創刊するに当りて、これ幸とばかり紙名とは多少異なるが、右金看板を堂々と門柱に掲げたものである。それで支那人間では、シヨンチンパオコワン(盛京報館)で通ったものである」(『秋風三千里』一九六六年、南北社)。

- (22) 東亜同文書院第一期卒業生。『東亜同文会と中国』によれば、卒業と同時に『順天時報』に入社して主筆となったといふ。外務省囑託を兼ね、一九一一年大阪朝日新聞社に入社している。衆議院議員も務め、東亜同文会が戦後解散する時には常務理事であった。

- (23) 二年後の明治四十三年(一九一〇)一月七日の報告では『盛京時報』の「持主」は中島真雄(主ナル出資者)、「主筆」は一宮房次郎(東京遊学中)、「備考」に「外務省ヨリ一ヶ年四千五百円ヲ補助ス」とあり、また「外二記者日本人四名清国人三名」とある。また翌年一月九日の報告では、「持主」中島真雄は変わりないが、「主筆」が中西正樹、外務省の補助金は「一ヶ年三千六百円」に更に減額され、記者は日本人二名、清国人二名である。

- (24) 中国同盟会のメンバーで、彼を主筆として招いたのには、北京時代の中島と親しい仲にあつた陶大均(下関条約に際して李鴻章の通訳を務めた)の力添えが大きかったと思われる。『不退庵の一生』に、次のように書かれている。「マ幸に当時奉天交渉局総辨は陶大均氏であり、陶氏とは私が北京の順天時報を経営して居た頃より極く親しくして居たのと、氏の赴任前、私は北京にて外務部尚書邦桐氏に新聞発行の事を話したので、邦桐氏からも私の事に付き陶氏に懇切の注



意があつた由である。それ故に今回私の新聞発行に付ては、官辺の交渉より漢文記者の傭聘に至るまで、其の労を愛ま  
ず心配し呉れたのは同報の成立上多大の便宜であつた。

- (25) 著者の署名はないが、前述の徐鏡心か、それとも『順天時報』に続き、『盛京時報』でも創刊時より社説を担当し、中  
国語で遠慮会釈ない論陣を張つたという菊池貞二か。菊池は『順天時報』で袁世凱を激しく批判したのと同様、『盛京時報』  
でも張作霖の政策を忌憚なく批判したというが（『東亜同文書院大学史』）、自身は『盛京時報』の持つ性格的立場から、張  
作霖の施政には小酷く反対もし、攻撃もしたが、余個人としては彼の人物や政治的手腕を、相当高く評価していた（『秋  
風三千里』）と回想している。

- (26) 寇振鋒「清末政治小説理論における明治小説理論の受容」（『言語文化論集』第三十卷第一号、二〇〇八年十月、名古屋  
屋大学言語文化部・国際言語文化研究所）による。

- (27) 一九〇八年末を一区切りとしたのは、翌年一月以降の一時期（三月）、初めて「白話」と「小説」の同時掲載が見ら  
れることから、「白話」と「小説」の間に一応の線引きができたのではないかとひとまず仮定したためである。がそれ以  
降「白話」は掲載されるが、「小説」は同年八月二十五日まで掲載されていないことも付け加えておく。

- (28) 題名の後にひいき目意味する「敝帚千金」とある。署名に見えなくもない。

- (29) 『順天時報』は既に述べたように、中島真雄が『盛京時報』創刊に先立ち、北京で創刊した新聞である。

- (30) この号より「附張」が設けられ、「小説」、「白話」、「文苑」はここに掲載される。「附張」は第一三三号（四・四）には  
ないので、恐らく現在欠号の、「偵探奇譚」の第一回が掲載されたであろう第一三三号か一三四号から始まったと思われ  
る。後の「神皋雜俎」の初期の形といえよう。「附張」にはそのほか、「各省新聞」、「奏摺（奏上文）録要」、「東西叢談」、  
「雜報」、「記事」、「專件」、「市井雜俎」などの項目がある。「神皋雜俎」の開始時期については注（6）を参照されたい。  
「神皋雜俎」が最も早く登場する四月二日号を見ると、「小説」、「筆記」、「品花（妓女に関する記事）」、「笑林」、「別録」、  
「雜報」、「來件」の項目があり、「附張」と構成はほぼ変わらないように見える。

(31) この号には「附張」がない。

(32) 16は第九二号掲載であるが、第九三号は欠号である。また第一三三号、第一三四号は欠号であるが、第一三五号掲載の「偵探奇談」が連載の四回目となつてゐるため、現時点では第九三号から第一三二号までの三十九号分の間隔があるということになる。